

| | |
|-------------|---|
| Title | <研究創案ノート>シャアラーニー研究の軌跡とその課題 |
| Author(s) | 遠藤, 春香 |
| Citation | イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2012), 5(1-2): 209-215 |
| Issue Date | 2012-02 |
| URL | https://doi.org/10.14989/161184 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

シャアラニー研究の軌跡とその課題

遠藤 春香*

Review on the Previous Studies on al-Sha'rānī and a Subject for
Further Scholarly Examination

ENDO Haruka

‘Abd al-Wahhāb ibn Aḥmad al-Sha'rānī (d. 973/1565) was a Sufī thinker who lived through the early period of Ottoman Egypt. He was greatly influenced by Ibn al-‘Arabī (d. 638/1240), one of the most famous mystical philosophers in the Islamic tradition, and espoused Ibn al-‘Arabī’s ideas in the face of opposition. It has been pointed out that al-Sha'rānī’s books about Ibn al-‘Arabī played a role in spreading the latter’s theory throughout the Islamic world. Therefore, research on al-Sha'rānī and analyzing how he interpreted Ibn al-‘Arabī will give us a new aspect in understanding the philosophy of Ibn al-‘Arabī.

As a preliminary survey for my future research, this paper examines previous studies on al-Sha'rānī and clarifies how research on him has progressed so far. They discuss al-Sha'rānī from three different points of view. First of all, many previous studies use his works in order to get a historical and cultural record of 16th of Egypt. Secondly, some studies recognize him as a great Sufī thinker who appeared in the early Ottoman Empire and describe his background and basic ideas. Finally, a couple of studies take up his own theory and discuss it in depth. In this paper, each study is analyzed according to these viewpoints. This process will make it clear that despite the fact that al-Sha'rānī supported Ibn al-‘Arabī’s theory, little research has focused on how al-Sha'rānī interpreted it and what he really advocated in his works.

The paper concludes by nominating a subject for further scholarly examination: the clarification of al-Sha'rānī’s own ideas taking into consideration the social and governmental background in 16th century Egypt. This will lead to the elucidation of the thought inherited and developed among the school of Ibn al-‘Arabī in time of the Ottoman Empire.

1. 始めに

エジプト最後の偉大な学者¹⁾、あるいは前近代における最後の偉大なスーフィー思想家²⁾と称される人物に、マムルーク朝末期からオスマン朝期にかけて活躍したシャアラニー ‘Abd al-Wahhāb ibn Aḥmad al-Sha'rānī (d. 973/1565) がいる。シャアラニーは、法学、ハディース学、神学、アラビア語文法学、医学、スーフイズムなど、様々な分野において著書を残した。ウラマーとしての彼はシャーフイー法学派に属し、シャリーアの遵守を主張し、同時代の墮落した杓子定規的なウラマーや、シャリーアに従わないスーフィーらを強く批判した。また一方で、彼はスーフィーとしても活躍し、様々な教団と関わりを持ち、イブン・アラビー (d. 638/1240) に影響を受けたイブン・アラビー学派として、その思想の正統性を唱えた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) K. V. Johnson, 1985, *The Unerring Balance: A Study of the Theory of Sanctity (Wilāyah) of ‘Abd al-Wahhāb al-Sha'rānī*, Ann Arbor, Mich.: UMI Dissertation Services, p. xi.

2) D. F. Reynolds, 1997-1998 “Shaykh ‘Abd al-Wahhāb al-Sha'rānī’s Sixteenth-Century Defense of Autobiography,” *Harvard Middle Eastern and Islamic Review* 4 (1-2), p. 123.

シャアラーニーの著作はアラブ世界の各地で読み継がれ、それがイブン・アラビーの思想の普及につながったと言われる³⁾。そこでシャアラーニーによるイブン・アラビーの思想解釈を考察することで、オスマン朝アラブ世界の知識人の間で継承されていた存在一性論を解明することができ、ひいてはイブン・アラビー学派研究に新たな視座をもたらすことができるだろう。

本稿ではシャアラーニーの思想研究が現在までどのように進められてきたかを概観し、その上で今後の研究の方向性を検討したい。

以下にシャアラーニーに関する先行研究を年代順で記す⁴⁾。

- G. Flügel. 1866. "Scha'rani und sein Werk über die muhammadanische Glaubenslehre," *DMGZ* 20, pp. 1–48.
- M. A. Von Kremer. 1868. "Notice sur Sha'râny," *Journal Asiatique* 11(6), pp. 253–271.
- N. Perron. 1870. "Balance de la loi musulmane par le Cheikh el-Charani, Introduction," *Revue Africaine*, XIV 81, pp. 209–252, XIV 82, pp. 331–348.
- I. Goldziher. 1872. "Linguistisches aus der Literatur der muhammedanischen Mystik," *ZDMG* 26, pp. 764–785.
- . 1884. "Zur Literatur des Ichtilâf al-mađâhib," *ZDMG* 38, pp. 669–682.
- . 1901. "Über den Brauch der Mahjâ Versammlungen im Islamm," *WZKM* 15, pp. 33–59.
- D. B. MacDonald. 1903. *Development of Muslim Theology, Jurisprudence and Constitutional Theory*. Reprint: Lahore: The Premier Book House, 1960.
- M. Horten. 1915. "Mönchtum und Mönchsleben im Islam nach Scharani," *Beiträge zur Kenntnis des Orients* 12, pp. 64–129.
- M. Smith. 1939. "al-Sha'rânî the Mystic," *The Muslim World* 29, pp. 240–247.
- A. J. Arberry. 1950. *Sufism: An Account of the Mystics of Islam*. London; reprint: New York: Harper Torchbooks, 1970.
- C. E. Padwick. 1961. *Muslim Devotions: A Study of Prayer-Manuals in Common Use*. London: SPCK.
- J. C. Garxin. 1966. "Index des Tabaqât de Sha'rânî (pour la fin du IX^e et le début du X^e S.H.)," *Annales Islamologiques* 6, pp. 31–94.
- A. Schimmel. 1968. "Sufismus und Heiligenverehrung im Spätmittelalterlichen Ägypten (eine Skizze)," *Festschrift Werner Caskel*. Leiden: E. J. Brill, pp. 274–289.
- V. Vacca. 1968. *Vite e Detti di Santi Musulmani*. Turin: Editrice Torinese.
- M. Winter. 1973. "Sha'rani and Egyptian Society in the Sixteenth Century," *Asian and African Studies* 9, pp. 313–338.
- . 1982. *Society and Religion in the Early Ottoman Egypt: Studies in the Writings of 'Abd al-Wahhâb al-Sha'rânî*. New Brunswick: Transaction Books.
- K. V. Johnson. 1985. *The Unerring Balance: A Study of the Theory of Sanctity (Wilâyah) of 'Abd al-Wahhâb al-Sha'rânî*. Ann Arbor, Mich.: UMI Dissertation Services. (A PhD thesis submitted to the graduate school of arts and sciences, Harvard University)
- M. Winter. 1992. *Egyptian Society Under Ottoman Rule, 1517-1798*. London and New York: Routledge.
- É. Geoffroy. 1995. *Le Soufisme en Égypte et en Syrie sous les derniers Mamelouks et les premiers Ottomans: orientations spirituelles et enjeux culturels*, Damas: Institut français d'études arabes de Damas.

3) M. Chodkiewicz, 1993, *An Ocean without Shore: Ibn 'Arabî, the Book, and the Law*, trans. David Streight, Albany: State University of New York Press, pp. 10–11.

4) この他にトルコ語およびアラビア語で書かれた先行研究が存在するが、本論文の射程として、ヨーロッパ言語のものに限った。

- K. V. Johnson. 1997. “‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī: A Brief Study of the Life and Contributions of a Sixteenth-Century Egyptian Mystic,” *Islamic Culture* 71, pp. 15–39
- D. F. Reynolds. 1997-1998. “Shaykh ‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī’s Sixteenth-Century Defense of Autobiography,” *Harvard Middle Eastern and Islamic Review* 4(1-2), pp. 122–137.
- J. G. Katz, 1997. “An Egyptian Sufi Interprets His Dreams: ‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī 1493–1565,” *Religion* 27, pp. 7–24.
- L. Hudson. 2004. “Reading al-Sha‘rānī: the Sufi Genealogy of Islamic Modernism in Late Ottoman Damascus,” *Journal of Islamic Studies* 15(1), pp. 39–68.
- S. Pagani. 2004. “The Meaning of the *Ikhtilāf al-Madhāhib* in ‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī’s *al-Mīzān al-Kubrā*,” *Islamic Law and Society* 11(2), pp. 177–212.
- A. Sabra. 2006. “Illiterate Sufis and Learned Artisans: The Circle of ‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī,” In *Le développement du soufisme en Égypte à l’époque mamelouke*, edited by Richard McGregor and Adam Sabra, Le Caire: Institut français d’archéologie orientale, pp. 153–168.

シャアラニーは、ヨーロッパ言語で書かれた最初の研究である 1866 年の Flügel による論文を端緒として、その後様々な文脈で論じられてきた。本論文ではシャアラニーに関する研究を 3 つの論点に大別して説明する⁵⁾。第一に、歴史あるいは文化研究の資料・素材としてシャアラニーの文献を用いた先行研究である。次に、シャアラニーの価値観や思想の概略を彼が生きた時代背景に関連させながら扱った研究が 2 点目である。そして最後に、シャアラニーの思想を綿密な分析によって論じた研究を挙げる。以下、3 つの項目ごとに先行研究を概観する。

2. 論点①—研究の資料・素材として

1870 年の Perron による研究は、イスラーム法について論じたシャアラニーの代表的著作 *al-Mīzān al-kubrā* 『大なる天秤』を一部翻訳し紹介したものである。彼の論文は、19 世紀後半のフランスによるアルジェリアの統治に際して、イスラームについての理解が必要であるという意識に基づいて執筆された。これは、ヨーロッパによる植民地支配の時代において、政治的要請に応えた研究の一つであると言えるだろう。

1870 年代から 1900 年代にかけて書かれた Goldziher の 3 点の論文は、イスラームの文化や慣習、法学などの展開を探るために、シャアラニーの著作を随時用いたものである。同様に、1901 年の Horten もイスラームにおける「修道所生活」(Mönchsleben) の実態を解明するという目的から、*al-Ṭabaqāt al-kubrā* 『大列伝』(聖者らの伝記) を一部引いている。

1960 年代の Padwick の研究書は、イスラームにおける礼拝の形式や方法などについて詳細に論じたものである。その中でシャアラニーの自伝 *Laṭā‘if al-minan* 『恩寵の精妙さ』を随所で引用している。シャアラニーの宗教的儀礼に関する見解を窺うことはできるが、その思想を明らかにしていない。

シャアラニーの著作である『大列伝』、*al-Ṭabaqāt al-ṣuḡhrā* 『小列伝』(ウラマーたち中心の伝記)、*al-Ṭabaqāt al-wuṣṭā* 『中列伝』(上述 2 つの混合) を取り上げ、それぞれの内容や成立の過程、構成の特徴などを論じているものに、1966 年の Garxin の論文がある。彼は、シャアラニーの列伝に名が挙がっている聖者たちの記述を紹介しながら、それらが年代研究という観点から見れば信

5) 他に未入手の研究書として、A. E. Schmidt, 1914, *‘Abd al-Wahhāb ash-Sha‘rānī i Ego Kniga Razispannykh Zhemchuzhin*, St. Petersburg がある。シャアラニーの著作、詳細な伝記、宗教観について述べた研究とされる。

頼に足る情報でないことを示唆している。Winterが指摘したように、この研究は歴史家としての視点から、シャアラーニーの著作を分析したものである⁶⁾。

1968年のSchimmelの論文は、15世紀エジプトの聖者信仰について詳細に論述した研究である。Schimmelは15世紀のエジプトで活躍していたスーフィーらの活動や、マウリドをはじめとする聖者信仰に関わる慣行について言及する。結論としては、オスマン朝に政権が移ってからもこれらの慣行が変わらずに続けられたことが述べられる。論文中の歴史資料の一つとして用いられたのが前述の『大列伝』であり、シャアラーニー自身を扱った研究ではないことが窺える。

同じく1968年のVeccaによる研究は、シャアラーニーの生涯を述べた上で、『大列伝』を部分的に翻訳した。当時書かれた聖者伝の具体例として、『大列伝』を紹介した研究であると言える。

近年の研究としては、2004年のHudsonによる論文と、2006年のSabraによるものが挙げられる。Hudsonは19世紀のオスマン朝シリアにおいて、シャアラーニーの代表的著作(『大列伝』、*al-Yawāqūt wa al-jawāhir*『宝石と宝玉』など)が広く読まれていたことを指摘した上で、オスマン帝国末期におけるシリア史を概観する。そして19世紀の知識人たちが何を好んで読んでいたかに着目することで、当時のシリアが抱えていた問題、あるいはその文化構造を明らかにしようとした。歴史研究ではあるものの、シャアラーニーの影響力が後代にまで残っていたことを実証したという点で、価値のある論文である。

一方、Sabraの研究は、エジプトにおけるシャアラーニーの主要な師2人が盲目であったことに触れ、当時のエジプト社会の中心は学のあるウラマーではなく、人々の間で信奉される文盲の聖者と、識字能力を有する一般大衆であったことを述べる。シャアラーニーが活躍した16世紀前半、聖者は知識人によって論じられる抽象的な存在ではなく、実際の社会に強く結びついていたことの窺える点が彼の学術的貢献である。

3. 論点②—シャアラーニーの人物像、思想の概略

先述したとおり、Flügelがシャアラーニーに関する論考をはじめてヨーロッパ言語で記した研究者である。彼は、シャアラーニーの残したスーフィズム関連の著作に着目し、前述の『宝石と宝玉』を章ごとに分けて、最初の数行ずつ翻訳・紹介した。彼は翻訳以上の深い考察は加えていないものの、19世紀後半という早い段階から神秘家としてのシャアラーニーを読み解こうとした点で、意義深い研究である。

シャアラーニーは社会問題に敏感な人物であり、共同体の中で見られる様々な問題に対して自分の意見を示した。このようなシャアラーニーの人物像を素描したものとして、1868年のVon Kremer論文を挙げることができる。Von Kremerはシャアラーニーの*al-Bahr al-mawrūd*『到達された海』を引用しながら、彼のウラマー批判や、農民の状況への同情、政府に対する不平などを簡潔にまとめた。結論部分において述べられる、シャアラーニーがイスラームにかつての統一性をもたらそうと尽力し、近代におけるイスラーム改革の先駆けになったという指摘は、同研究以降も時折見られるものである⁷⁾。Von Kremerは本論文が取り上げた先行研究の中で、最初にその指摘をした人物として注目に値する。

スーフィズムの通史を扱った1903年のMacdonaldによる研究において、シャアラーニーは、15

6) Winter, 1982, *Society and Religion in the Early Ottoman Egypt: Studies in the Writings of 'Abd -al-Wahhāb al-Sha'rānī*, New Brunswick: Transaction Books, p.10.

7) M. A. Von Kremer, 1868, "Notice sur Sha'rānī," *Journal Asiatique* 11(6), p. 271.

世紀後半以降に墮落していったスーフイズムの潮流にあって、この時期を代表するスーフイーとして紹介されている。Macdonald はシャアラニーの性格などを説明した後、彼の名著であり且つ最も興味深い著作として『恩寵の精妙さ』を取り上げ、その内容を箇条書きにして簡潔に紹介した。

Von Kremer 以降、シャアラニーは上述の Goldziher や Horten らの研究において資料提供者としての位置付けを与えられることが多く、シャアラニー自身についての論及はしばらくの間看過されてきた。1939 年に Smith が記した論文では、しかし、シャアラニーが何よりもまず神秘主義者であったことが強調された。Smith はシャアラニーの著作の中に、ファナーやバカーに関する記述が見られることを指摘し、彼を神秘家として捉え直す必要性を提唱した。Smith の主張はこの点において画期的であるものの、それ以上に掘り下げた議論は見られない。

年代順に著名なスーフイーを論じた 1950 年の研究の中で Arberry は、スーフイズム衰退期の中で現れた卓越した思想家としてシャアラニーを取り上げ、『恩寵の精妙さ』の一部を翻訳した。同研究は思想の分析には立ち入らないものの、シャアラニーがスーフイー研究者の間で重要な思想家として認識されていたことが窺える点で興味深い。

1971 年の Trimmingham の研究において、シャアラニーはウィラーヤ（聖者性 *wilāya*）のタサウウフからの乖離を懸念し、これを元の関係に戻そうとして聖者論を唱えたとされている⁸⁾。シャアラニーの聖者論に当時から着目していたことは注目すべき洞察であるが、タリーカの発展史を論じる中で簡単に触れられる程度である。なお、この理論の具体的な分析は、後述する 1985 年の Johnson によって成されることになる。

1970 年代前半から 1990 年代前半にかけて、Winter はシャアラニーの全体像を描こうとした画期的な研究を 3 点残している。まず 1973 年の論文は、シャアラニーが 15 世紀後半から 16 世紀前半の社会・政治的背景をいかに捉えていたかを扱った。例えば、スーフイーが為政者とどう関わるべきかという問題や、同時代を生きる農民、シャリーフ、そして女性に対するシャアラニーの見解がそれぞれ述べられている。

先の論文を拡張させた 1982 年の研究は、日常生活の様々な事柄に対するシャアラニーの価値観、あるいは各法学派やタリーカについての認識を幅広く論じている。さらに、シャアラニー周辺の人物やエジプトにおけるスーフイズムの浸透などについて、詳細な記述が加えられる。中でもシャアラニーがイブン・アラビーをどのように捉え、いかに擁護したかについて触れた考察は興味深い⁹⁾。同研究はシャアラニーという人物を包括的に扱った卓越した研究であると言えるが、その内容は歴史的記述の比重が大きい。そのためシャアラニーの思想自体については二義的に扱われ、神秘思想家としてのシャアラニー像があまり鮮明に論考されていないように思われる。

1992 年の研究では、シャアラニーが自分を取り巻く社会状況をどのように捉えていたかが述べられる。Winter の関心は、1517 年から 1798 年までのエジプトにおける支配階級、ウラマー、スーフイーなどの社会的な役割や歴史的な位置付けに加え、カイロの生活状況の論述である。シャアラニーが生きた時代の社会的・政治的背景を綿密に描くという点で、Winter の貢献は大きい。しかし、Winter が法学対神秘主義という二項対立を前提として論考している感は否めない¹⁰⁾。この点は、

8) J. Spencer Trimmingham, 1971, *The Sufi Orders in Islam*, New York and Oxford: Oxford University Press, p. 141.

9) M. Winter, 1982, *Society and Religion*, pp.166–172. シャアラニーがイブン・アラビーを支持した理由は社会的なイデオロギーによるものであるとした。これは当時の社会において、イブン・アラビーに反対しつつスーフイーではいられないという認識によるものである。

10) M. Winter, 1982, *Society and Religion*, pp.230–236 and M. Winter, 1992, *Egyptian Society Under Ottoman Rule, 1517–1798*, London and New York: Routledge, p. 161.

当時のスーフィーとウラマー間の看過しがたい緊張関係の中で、シャアラニーは両者の妥協点を見出そうとしたという指摘に端的に表れている。

Geoffroyによる1995年の研究は、16世紀のエジプト・シリアのスーフィズムの思想的特徴、タリカカの展開などを記述した。そこで著名なスーフィーの一人として、シャアラニーの背景や思想の概略が随時紹介される。Geoffroyは、ウラマーとスーフィーを統合しようとした思想家としてシャアラニーに着目している¹¹⁾。しかしながら、シャアラニーがどのように両者の統合を試みたかに関する具体的論述は行なわれていない。

1990年代後半のReynoldsの研究は、自己を賛美した自伝である『恩寵の精妙さ』に着目した。自伝を書くことが憚られた15-16世紀のアラブ世界において、シャアラニーがどのように同著を正当化したのかをその序文の翻訳によって紹介した。Reynoldsの研究は、彼が生きた時代の社会的風潮から著作のスタイルを考察しようとした、興味深いものである。

4. 論点③—思想研究

シャアラニーの思想について初めて体系的に論述したものとして、1985年のJohnsonによる論文がある。この研究はまず、ティルミズイー(d. 318/905)とイブン・アラビー(d. 638/1240)の聖者論を整理した上で、シャアラニーが時代の要請に合わせて、どのような独自の聖者論を展開したかを解析する。Johnsonによれば、聖者に宇宙の柱あるいは世界の守護者としての超越的な役割を与えていた従来の聖者論は、シャアラニーにとってあまりに形而上学的過ぎた。16世紀にかけてのエジプトにおいて必要とされ、また、シャアラニーがあるべき姿として提示したのは、むしろ民衆の苦しみを引き受け、時には人々の罪を贖うような、民衆に積極的に関わる聖者であった。

Johnsonが繰り返し強調したのは、シャアラニーが聖者論を正統イスラームの中に位置づけようとした点である。Johnsonの研究は、スーフィーとしてのシャアラニーの思想を初めて、そして最も具体的に分析したものであり、シャアラニーの思想研究上価値のある研究である。1997年の論文は、この博士論文を簡潔にまとめたものである。

1997年のKatzによる論文は、シャアラニーの夢解釈に着目している。Katzによれば、シャアラニー以前は、夢が未来を予見するものだと捉えられていた。一方シャアラニーは、夢をスーフィーの心的状態や行動を反映し、修行道の途上にあるスーフィーらの指針になるものと読み替え、新たな夢解釈の方法を提示した¹²⁾。スーフィーがシャリーアから逸れた時に警告を与えるという、スーフィーの行動と関連づけた夢解釈は、シャリーア(ここでは法学を示す)とスーフィズムとの間に差異を設けないシャアラニーの思想を示唆している。法学とスーフィズムとを結びつけた彼の立場を指摘した点で意義のある研究ではあるが、スーフィーとしてのシャアラニーの思想理解に大きく資するところはない。

シャアラニーの思想研究に関する最新の研究は、2004年のPaganiによるものである。Paganiは、シャアラニーが近現代において一方ではイジュティハード(*ijtihād* 法規定発見の営為)を提唱した改革者として、他方ではタクリド(*taqlīd* ウラマーの見解に従うこと)を重視した伝統主義者として持ち上げられることを取り上げ、シャアラニーの立場はそのどちらでもなかったことを主

11) É. Geoffroy, 1995, *Le soufisme en Égypte et en Syrie sous les derniers Mamelouks et les premiers Ottomans: orientations spirituelles et enjeux culturels*, Damas: Institut français d'études arabes de-Damas, pp. 95-98, 485-488.

12) 例えばもし蠅を口の中に入れてしまった犬がくしゃみをし、その蠅が自分の衣服にくっついてしまうような夢を見たら、それは夢を見た人物が現実の世界において、シャリーアに反した欲情を抱いていることを警告するものであると解釈された。J. G. Katz, 1997, "An Egyptian Sufi Interprets His Dreams: 'Abd al-Wahhāb al-Sha'rānī 1493-1565,'" *Religion* 27, p. 13.

張した。Pagani はシャアラーニーのイジュティハードに対する見解を論述しながら、イブン・アラビーの思想との比較を試みた。同研究は本論文で挙げた研究の中で唯一、イブン・アラビーの思想との関連からシャアラーニーを論じたものであることは注目に値する。また、シャアラーニーがカシュフ (kashf 開示) の確実性とイジュティハードによって得られる知とを認識論的に同じものと捉えていた指摘なども意義深い。

5. 終わりに

以上概観してきたように、シャアラーニーに関連した研究の多くは、時代状況あるいはエジプトの文化を探るために彼の著作に言及したものか、あるいはマムルーク朝期からオスマン朝期のスーフイズムやスーフイズム通史を論じる際に、二義的にシャアラーニーに言及したものが大半であることが窺える。これに対し、シャアラーニーの具体的な思想分析に取り組んだ研究は、未だ数本しかない状況である。

シャアラーニーはイブン・アラビーを擁護し、その思想の正統性を主張した人物として知られてきた。しかし一方で、シャアラーニーの思想には深みがないということも指摘されている¹³⁾。この指摘は、聖者論を民衆の側に引きつけて捉え直そうとしたシャアラーニー自身の試みに見られるように、彼の思想の焦点が形而上学的な議論よりも、現実的な世界、つまり、彼が生きた時代の社会的・政治的状况に即した論述に主眼が置かれていたことによるからであろう。

彼の神秘思想について具体的に論考した研究は非常に少ない。そのため、シャアラーニーが実際にはどのような主張を持ってイブン・アラビーを解釈し、イブン・アラビーの理論のどの部分を受容したのか、あるいはしなかったのか、また、シャアラーニー自身がいかに独自の思想を展開していったのかについては、今後も研究される余地がある。

思想は歴史的・社会的・政治的背景と独立した形で生まれ、存在しているわけではない。シャアラーニーの生きた時代背景にも注意を払いながら、彼がどのような文脈の中でイブン・アラビーを理解し、神秘思想を展開していったかについて考察を深める必要があろう。

今後は、思想研究と思想が生まれた歴史的・社会的・政治的背景の研究という2つの作業を通じて、シャアラーニー研究に新たな視座を与えるとともに、アラブ世界におけるオスマン朝期存在一性論学派の思想の意義と影響を解明していきたい。

13) Winter, 1982, *Society and Religion*, p. 310.